

## 5. 下ノ内浦遺跡 SK 2 土壌出土の石包丁

須藤 隆・阿子島 香

東北地方では名取・広瀬川流域の沖積平野において多くの石包丁が出土している。明治41年、坪井正五郎によって名取市館腰村植松山団、愛島笠島出土の2点の石包丁がこの地方で初めて学界に紹介された（坪井 1908 陸前名取郡地方に於ける見聞 人類学雑誌 23-267 PP.323-328.）。その後、昭和14、5年に仙台市南小泉遺跡から17点が蛤刃石斧などとともに出土し、この地方における弥生文化の様相が明確にされた（伊東 1950 南小泉石器時代遺跡 仙台市史 3 PP.13-31）。この地域、阿武隈川下流域・白石川流域において、現在その資料は、51遺跡100点に達する。この石包丁については、類例の収集が行われてきたが、その原産地、製作方法、使用方法など石包丁そのものの研究はほとんどなされていない。わずかに、福島県相馬市天神沢出土一括資料の分析が貴重なデータである（竹島国基編 1983 天神沢）。筆者の1人である須藤は、南小泉遺跡出土資料などについて、その観察を行ってきた。しかし、資料そのものがすでに長い期間人の手にさらされ、多くの損傷を被っており、使用痕、研ぎの様子などを観察するには限界があった。

本遺跡において埋葬土壌に副葬品として石包丁が埋納されていたことは、このような研究の限界にあった筆者らにとって、稀有な機会であった。この資料は明らかにその出土状態から埋納後の器面損傷をあまり被っておらず、包含層出土資料の場合などに比べ、より使用時に近い状態の使用痕観察が行えると判断された。このような観点のもとにこの重要資料の観察と使用痕分析を行った。

### (1) 出土石包丁の特徴

SK 2 土壌からは大型蛤刃石斧1点とともに2点の石包丁が出土した。

石包丁 S-1 粘板岩、あるいは砂岩製。長さ141mm、幅58mm、厚さ7mmである。紐穴間隔は28mm、穴の径は4mmある。この地域の石包丁としては小型品である。刃部は大きく外弯し、背部は緩やかに外弯して紡錘形を呈する。両面ともに丁寧に研磨されている。背部よりに前段階の剥離の痕跡が認められる。この凹凸中にも研ぎによる荒い擦痕が認められる。刃部は幅1cm程度が両面から研がれている。この部分の擦痕は横方向に顕著である。刃部には細かな刃こぼれがみられるが、いずれも磨耗している。紐穴は両面からの回転穿孔である。この石包丁は黒色を呈し、白いすじが4mm程の間隔でのびている。この原石は、次にふれるS-2と同様に北上山系南部起源の可能性が極めて強いと判断された。

石包丁 S-2 灰色の粘板岩、あるいは砂岩製。長さ130mm、幅51mm、厚さが9mmある。紐穴間隔は17mmで、穴の径は4mmある。その形態はS-1と共通する。剥離の痕跡は紐穴周辺と背部に大きく残っている。しかし、両面ともよく研磨されており、あらい擦痕が見られる。刃部

は両面が丁寧に研がれている。この刃部にも細かな刃こぼれが認められるが、いずれも磨耗している。紐穴はやはり両面からの回転穿孔である。

## (2) 使用痕の観察

ポリッシュの分類法は、梶原・阿子島（1981 考古学雑誌 67-1 PP.1-36.）の設けた基準に基づく。洗浄にはブラシ類は用いず、①石けんと水道水（指で洗う）②超音波洗浄（150W、5分）、③石けんと水道水（指）、④超音波洗浄（150W、2分）、⑤アルコール綿（観察時）の順で行なった。金属顕微鏡を使用して100倍と200倍で観察した。

2点ともに明瞭なコーニグロス（ポリッシュタイプA）が広く認められたので、全面をくまなく観察してその強弱と分布状況を記録して「光沢分布図」を作成した。このポリッシュは、明るくなめらかで、表面は丸味を帯びて平坦であり、コーニグロスの特徴をよく示している。

発達状況を弱から強へと比較して考察すれば、まず未使用部分は研磨にかかわらずポリッシュは認められず、微粒状の構造を呈して、顕微鏡下でしばしば白くもやがけて見える（微凹凸と光の反射のためと思われる）。コーニグロスの発達は、まず極小の（10ミクロン以下）輝く点状光沢が現われ、それから、発達する部分が次第に面的広がりを呈してくる。ある程度発達すればパッチ（PATCH）が並ぶようになるが、コーニグロスパッチの大きさは石器の同一部分でも一様ではなく、大・小・微が併存している。均質に発達しない要因の一つは石器表面自体の性質であることがパッチ周囲の観察から知られる。また、パッチは微凹凸の高所により多く生じていることが、ピントの上下による観察から確認される。今回の例の場合、光沢が発達する現象とは、パッチの数が増加することおよび併存するパッチのうち大形の部類の大きさが拡大することであって、個々の光沢のパッチの明るさ自体が増す現象ではない。パッチが多数視野内に認められる発達した状態の部分においても、光沢パッチ部分と背景の部分ははっきりと区別され、前者の明るさ自体はパッチの大小にかかわらず一様である。

以上の変化は連続的なものであるが、光沢の分布を検討するために、基準を設けて、無・微弱・弱・中・強の段階に分けて図示する。

「無」光沢が認められない状態

「微弱」光沢が所々にわずかに点状に形成し始めている状態。各パッチ径は10ミクロン以下。

200～400倍でようやくコーニグロスらしい特徴が認められる。

「弱」パッチが点在している状態。接眼鏡スケールで石器表面に1000×70ミクロンのわくを作ると、その中に数個程度、径約20ミクロン以上のパッチが分布する状態。パッチの大きさは大形の部類でも径50ミクロン程度に達しない。コーニグロスとしての特徴は100倍でも認められる。

「中」パッチが群在している状態。同上のスケールわく内に、10～20個程度、径約20ミクロン

以上のパッチが分布する状態。大形のパッチは径50~100ミクロン程度、あるいはそれ以上になる。

「強」頁岩による実験では、コーニングロスが発達すると、一面にポリッシュがおおいつくす状態に至る。今回の例ではここまで発達した部分はなかった。

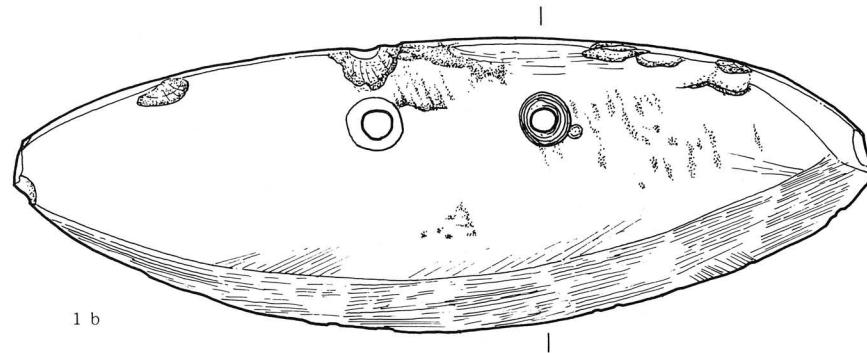
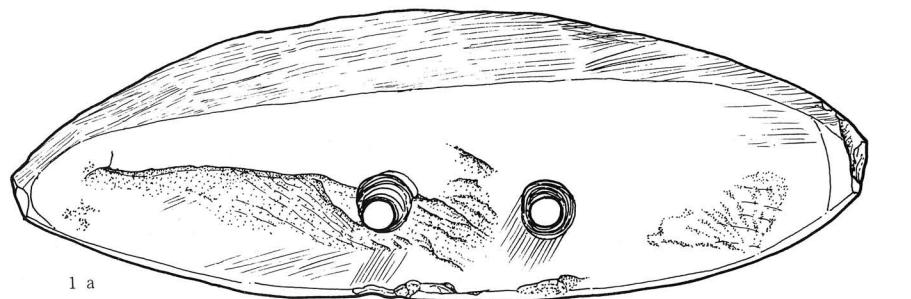
石包丁S-1 両面に同様の強さで光沢が広がる。刃部では体部に比較して著しく弱く、認められない部分が大きい。刃縁を垂直にみると「微弱」に若干分布してはいる。体部は刃部との境付近で最も強い。体部で「中」と「弱」が縞模様状を呈しているが、これは石材の質と強く対応している。石質は黑白の縞状構造を持っているが、縞の白い部分で光沢が強くなっている。この場合「中」と「弱」は連続的変化ではなくて境界が明瞭である。光沢の強さは左右対称ではなく、図のb面での左側にやや片寄る。紐穴の周辺部から背部にかけてはほとんど発達していない。

石包丁S-2 両面ともに同程度に光沢が広がる。やはり体部の内側に最も強く、刃部自体には比較的弱い。刃部にも部分的に「中」が分布している。図a面で体部右側に特に広がっている部分がある。紐穴の周辺から背部にかけてはほとんど認められない。a面左端に近く背部にかけて「中」の領域が存在している。

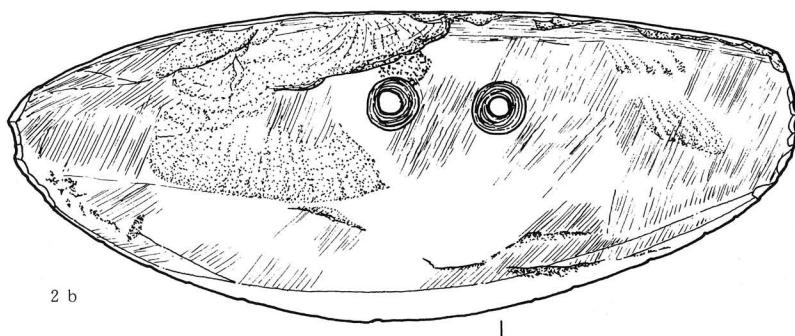
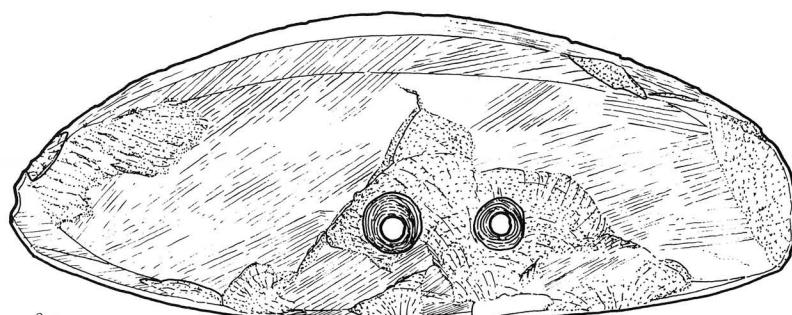
### (3) 結語

2点に共通する点をまとめ、若干の所見を述べる。

- ① 両面にほぼ同程度に光沢が広がり、強さも同程度といえる。従って、被加工物との接触度には両面の間に著しい差はない。
- ② 体部の下半（刃の側）に帯状に最も強い部分が広がっている。必ずしも左右対称であるとは限らない。そして刃部においては体部よりも確実に弱い。この強弱は刃部としての研磨痕の領域に（稜に）よく対応している。従って、刃部を研ぎ直していることは確実である。
- ③ 紐穴の周辺部から背部にかけては両面とも著しく微弱である。一方、この石器は体部に非常に広範囲に光沢が発達するほど使いこまれている。この部分が被加工物であるイネ科植物との直接的接触が妨げられていた部分であることを示している。
- ④ この石器の形態は、東北地方中部に分布する石包丁の典型である。2点ともに形態、大きさ、製作方法ともに強い共通性をもつ。石質に外見上の差異があるが、同一起源の原石を用いていると推定される。

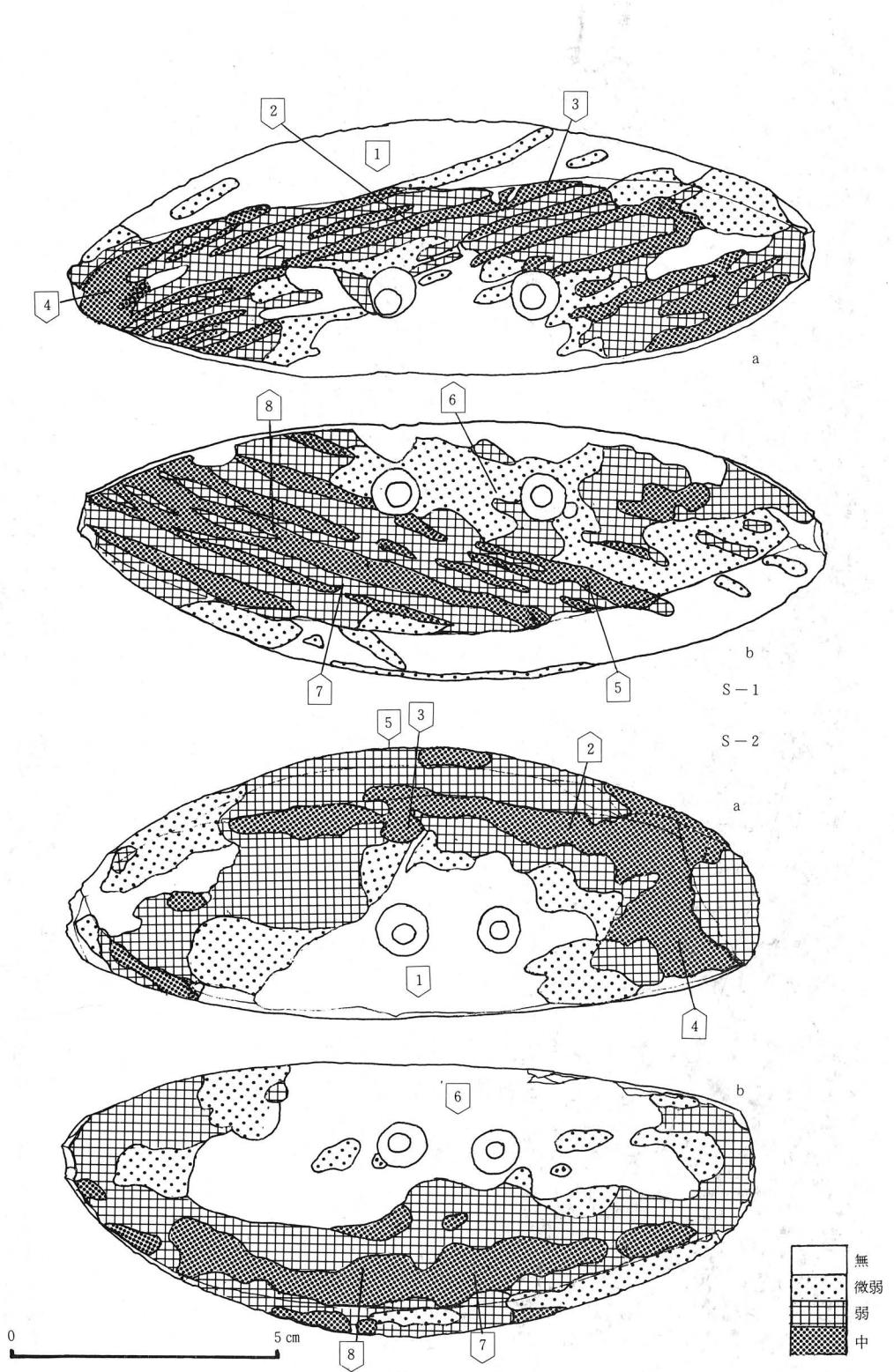


1 c



2 c

第24図 下ノ内浦遺跡 S K 2土壤出土石包丁実測図 (Scale 4/5)  
1、S-1石包丁、2、S-2石包丁



第25図 石包丁光沢分布図 (撮影個所 の上方三角部が写真画面の天方向)

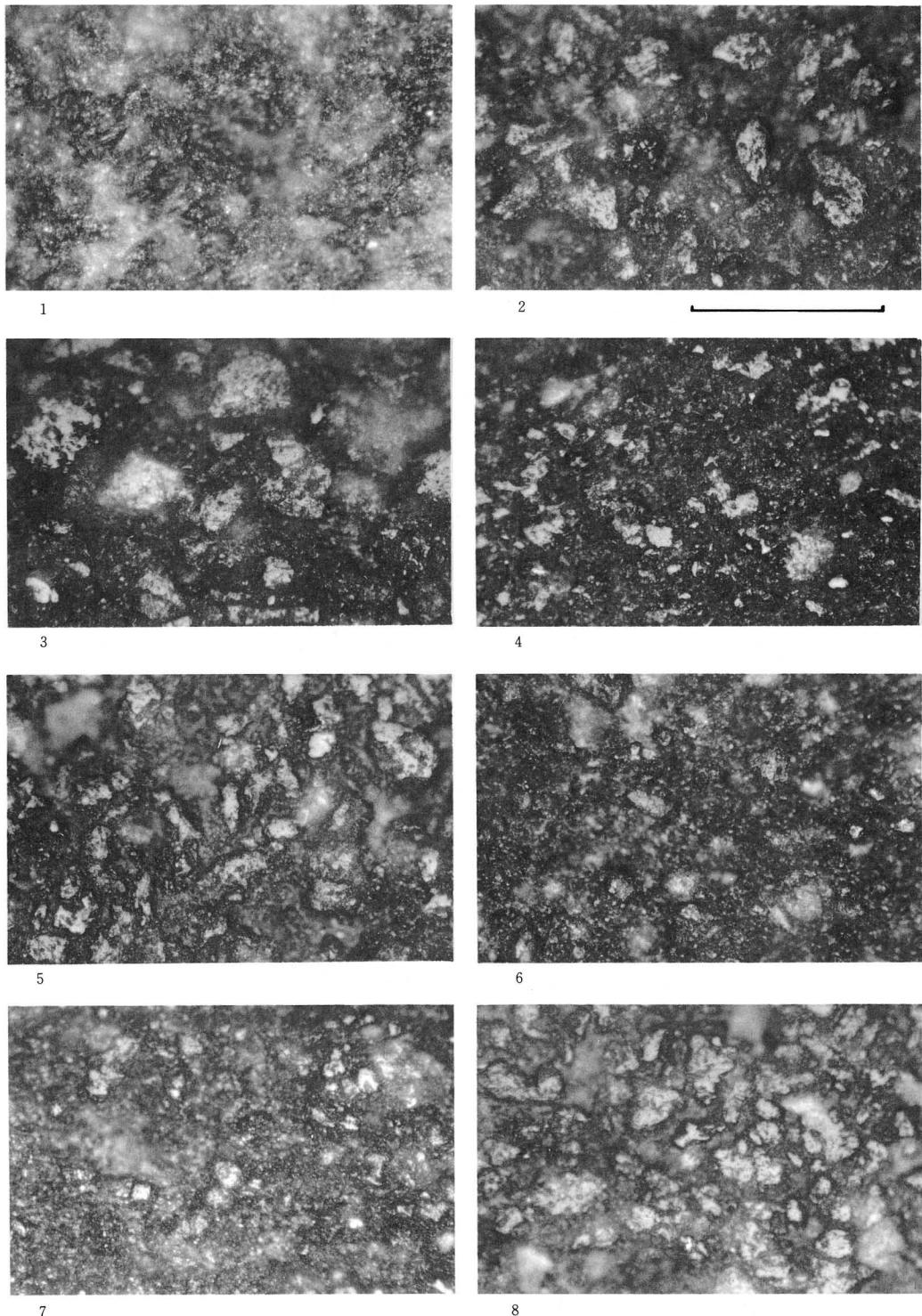
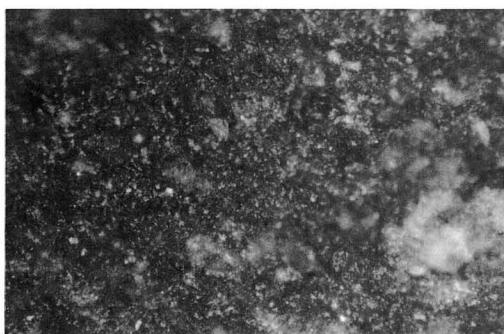
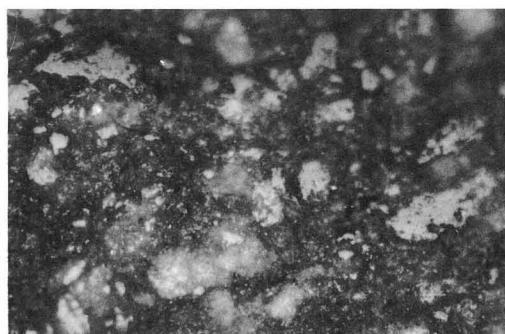


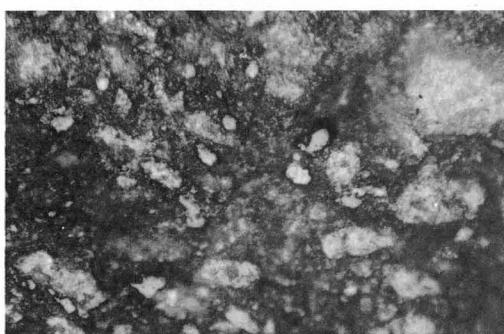
写真50 石包丁S-1の使用痕  
(右上スケールは200ミクロン。番号は光沢分布図の撮影個所番号と一致)



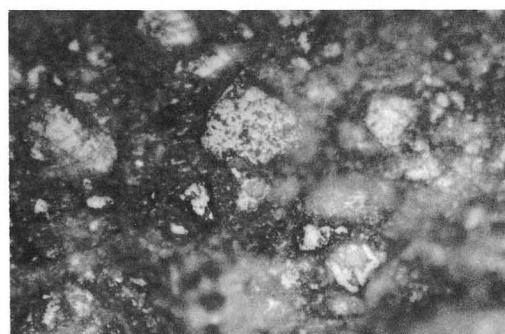
1



2



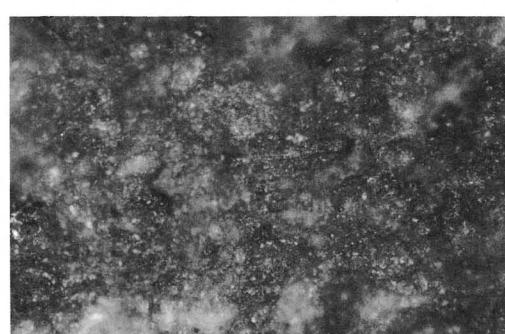
3



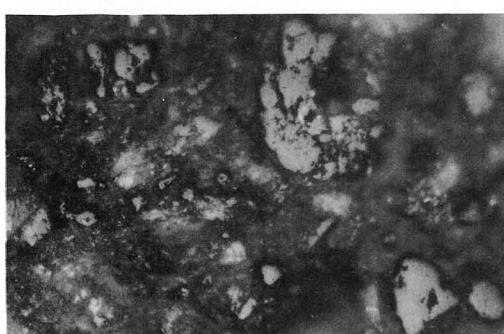
4



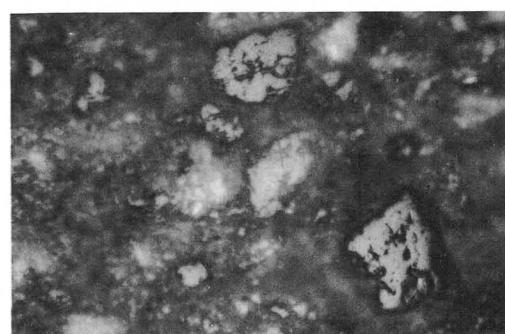
5



6



7



8

写真51 石包丁S-2の使用痕

(右上スケールは200ミクロン。番号は光沢分布図の撮影個所番号と一致)

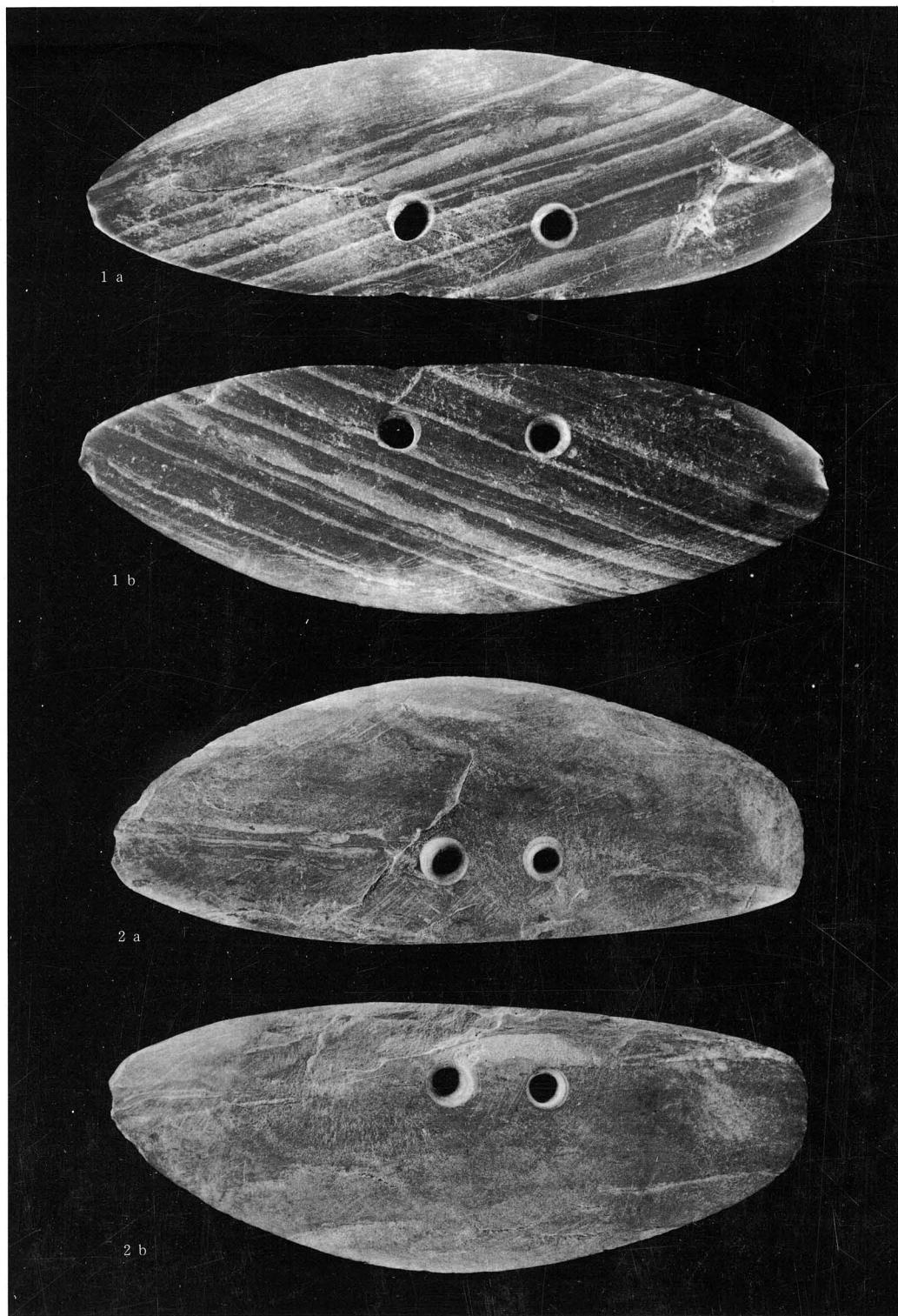


写真52 下ノ内浦遺跡 SK 2 土壌出土石包丁 (1 S-1, 2. S-2)